

2020年2月9日(日)／説教者：國分美生

説教：「分断を修復する神」

聖書：創世記3：1～24

本日の聖書箇所は、伝統的には罪というものどのようにして人間の世界に入ってきたかの説明として読まれてきました。

蛇が女に話しかけます。「この園にあるこれら全部の木からとって食べるな、と神は本当に言ったのか?」。旧約聖書では蛇は神に従わないように人間を誘惑する悪の象徴です。実に巧妙な質問です。女は「園の中央の木だけ食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから」と言われたと答えます。この「触れてはいけない」という言葉を女が付け加えたということから、神は人間をご自分の言ったことだけをオウム返しに繰り返すようなロボットを造られたのではなく、神の言葉を深い部分で受け止め、考えることができる従順さと感性を与えられたことを読み取ることができます。

神の禁止命令を破ってしまった罪を言い訳はできませんが、女が男の付属物ではなく、主体的に動き物語を形作っているという点に、ひとつ面白さがあります。男に依存しない、自分で考えて行動することのできる人間に見えます。実を食べ目が開かれた結果、二人は自分たちの無力さ・無防備さを知ります。私たちは神に対し身勝手に不従順である時ほど、自分の弱さやもろさを知らされるものです。神の禁止命令は時に私たちには理不尽な命令のようにも響きますが、神は人間が本来、神によって創造されたままの、神の息吹に満たされた姿で生きることができるよう神への従順を求められるのです。

当時すでに、長きにわたって男性が女性の優位にあるという絶対的社会的事実に対して、聖書は不十分ながらも抗っているように思えてなりません。16節は長いキリスト教の歴史の中で、「神がこう言っているから、女は男に制圧されるのが当然なのだ」と理解されてきました。ですがこれは神が人間に祝福として与えた関係ではなく、神との関係が損なわれてしまった中で人間が負わなければならなかったものであると、聖書は言っています。女性と男性は本来神によって優劣のない対等な者としてつくられました。

人間が神との関係を壊してしまったことでおきる分断は女性と男性の間に限りません。いかなる性別・国籍、住む場所や歴史・文化が違っても、私たちが誰かを見下すことも、誰かに見下されることも、神はお許しになりません。新約聖書は、人間が壊してしまった神との関係、隣人との関係を修復するためにイエス・キリストが来られたことを告げます。(国分美生)